日本大学大学院総合社会情報研究科紀要　No. 3, 203-214 (2002)

グロテスクとアラベスクの思考

恍惚として「美」を求める詩人の目

井手美弥子
日本大学大学院総合社会情報研究科

A study of the Grotesque and Arabesque

A Fine Frenzy of the Poet's Eye

Ide　Miyako
Nihon University, Graduate School of Social and Cultural Studies

I tremble in the solitude as Poe does. I cling to an ambiguous situation and ambivalent feelings towards hatred and love, which shows me the way to study on Poe. I would like to study "eyes" roaming in the search for fancy, "voices" roaring like thunder and "hands" touching to experience. For Poe, the last place would be " darkness bursting from crater of fire and the light that are weltering blow". Poe succeeds to publish a great book *Tales of the Grotesque and Arabesque*（1840）and leaves many messages to the next generation. He predicts a beautiful imaginative power, "fancy and imagination" beyond endless sorrow and pleasure. His affection to poetry and tales is to create and search for in exquisite beauty to console his own soul.

＜序論＞

ポウが出版した『グロテスクとアラベスクの物語』（1840）の序論において彼は当時流行していた、「ゴシック小説」についての見解を「魂の恐怖である」と発表した。

> " The epithets ' Grotesque ' and ' Arabesque ' will be found to indicate, with sufficient precision, the prevalent tenor of the tales here published…the scholar should recognize the distinctive features of that species of pseudo-horror which we are taught to call Germanic, for no better reason than some of the secondary names of German literature have become identified with its folly. If in many of my productions terrors has been the 'thesis', I maintain that terror is not of Germany, but of the soul…[i] "

ポウが主張する「魂の恐怖」とは彼の言葉を借りれば " nevermore " とその余韻効果である。失った者に対する強烈な「後悔」と「懺悔」。そして、それらに対する「思慕の情」、「憔悴感」などから生じる「魂の苦しみ」に尽きる。

主人公の余りにも強すぎる自意識過剰は、同時に深く潜在する愛情の欠落でもあったが、登場してくる人物によって暴露されて「崩壊」する。主人公は極端なエゴスチックな陶酔感に浸り、他者へ対する配慮がなかった。常に美しい眼差しを注ぐ女性の「愛」に気付かない主人公は、妻をあるいは恋人を失ってしまってから後悔を始めるのだ。

> … Each time I felt all the agonies of her death－and each accession of the disorder I loved her more dearly and clung to her life with more desperate pertinacity. But I am constitutionally sensitive－nervous in a very unusual degree. I became insane, with long intervals of horrible sanity….[ii]

これはポウが友人に宛てた手紙で、妻ヴァージニアの死後 1 年経ってから出されたものである。要約すれば「妻が死ぬという悲しみに、私は絶望した。妻が死ぬ事で更に深く愛しているという支離滅裂の正気の狭間で、狂人となり私は彼女の生命に死に物狂

いで縋りついた」。このポウの激白は「魂の叫び声」である。

「罪の意識」や「懺悔」は“ nevermore ”効果である。「カラス」が喋るたった一言の言葉は「重要な謎」となり、燦然と輝きナレーターの魂を貫く。“ nevermore ”は「響き」と「意味」へと連動し『大カラス』のストーリィを構成している。“ terror is of the soul ”はポウの言葉の拘りであるといえる。

> “ -----that I have deduced this terror only from its legitimate sources, and urged it only to its legitimate result.[iii] ”

彼は「詩人」として、「詩の究極のテーマ」について探求し「それはメランコリィー」であると述べている。「文学的価値の構成」を言葉とそれ自体の影響、つまり「効果」としての言葉としての「響き」や「意味」を直接人間の感性に与え、そこから生じる「想像力」の重要性を追求し、魂が浄化される事を図ったのである。

「魂の調和は音楽の状態である。」というピュタゴラスの定義がイギリスロマン派詩人達に受け継がれたように、キーツやバイロンが求めたギリシア的な「美への探求」へも執着する。狂おしいまでの繊細な「美」への探究心は、魂を高揚させて、極限な状態までに緊張させて陶酔感に浸り、その一瞬の恍惚とした「真空」の状態に陥った時「美」を見ることが出来るという。*The Haunted Palace*（1839）を朗々と謡うロデリックはひたすらに「魂」を高めていったが、妹を愛するという罪悪感に苛まされ、苦悩の果てに「自己」を「崩壊」させてしまう。「魂の恐怖」と「美への探究心」は紙一重なのだ。

ワーズワースやコールリッジ達が“ fancy and imagination ”を誠実に展開させた難解な「議論」にポウも興味をもった[iv]。「音楽的効果」を求めたポウの“ fancy and imagination ”論は彼らの考え方とは異なる。審美家として、ロデリックと共に「美」を求め、極限までに魂を高揚させて陶酔感を持続させた。その行為は高らかに「生命」を歌い上げたホイットマンとは異なる。彼の魂の息吹、“ respiration and inspiration”は力強く、神秘的な「今」のエネルギーを獲得しようとしたのである。しかし、ポウはそれを芸術的なもの、一瞬の美と考えていた。そして「美」の極地でそれを分析するという大胆な行為は正に「夢幻的」である。しかし、一方において自らに課した行為は繊細で鋭い刃の上を歩くように余りにも過酷であり、修羅の中でしか存在しないだろう。

『アナベル・リー』を思い浮かべる時、そのストーリィ性と言葉の音の響きから生じる“ imagination ”は懐かしい、昔物語という童話的な世界へ読者を導いて行く。「アナベル・リー」という美少女との禁じられた恋は、その「死」によって突然に終わりを告げる。ただ一人残されたナレーターは微動だにしないで、静かなる夜の砂浜に座っている。彼の頭上には満天の星が輝き、月の光が一筋となって彼の姿を「永遠の恋人」として包み込むだけだ。「アナベル・リー」という誘発的な音を読者の「脳」に直接働きかけて、その音を「魂」へ刻み付ける。「言葉」、「音」の表現に可能性を探求しようとする強い執念が見られるのだ。『ベル達』にも共通点が見られる。『ベル達』の躍動的で幻想的な「言葉」は読者をあたかも「夢」の中にいるような気分にさせて、決して忘れさせる事はないだろう。かれは「金」「銀」「銅」「鉄」など異なった「鐘」を取り上げて、奇妙で神秘的なものを提供しながら、片方では華やかな人生の「生」や「喜び」から残酷で避けられない「死」という「普遍的なもの」を暗示させている。ポウの強烈な“ imagination ”は「ベル」という言葉を繰り返して用いる。それぞれの「ベル」は調子よくリズムを刻み、快活な陽気さに溢れている。しかし読者は「ベル」が鳴り続ける「音」と言葉の羅列が、荘厳ではあるが同時にその魂が次第に「狂気」へと駆り立てられる事に気付くだろう。

…..
A paean from the bells!
And his merry bosom swells
With the paean of the bells!
….
To the throbbing of the bells――
Of the bells, bells, bells――

選び抜かれた言葉はピアノの鍵盤を叩いて音をだし、まるで「音楽」を奏でているようだ。魂を極限までに緊張させて、「音楽」による「魂の調和」とそこから得られる平穏感と陶酔感に浸りながら、究極の「美」を求めたのである。『イズラエフ』はその象徴的なものであろう。しかしながら、ポウは恐るべきもう一つの「意図」を隠していた。それは「崩壊の原理」を追求して止まない彼の「公理」が依然として多くの作品に見られるからである。

代表作である『大カラス』は 18 連、108 行から構成されている。印象的な言葉である“ nevermore ”を繰り返し用いて、その意味と響きから「効果」を狙った。『構成の原理』（1846）を出版した時『大カラス』を制作する過程や鑑賞の方法を読者に指導したが、そのようなポウの「詩」へ対する強烈で特異な個性は孤立感を招く結果となった[v]。彼の純粋で痛ましいほどの「美」の追求する理想はあまりにも崇高な精神性がみられ、そのために「狂気」が漂ってくる。『大カラス』はイギリスロマン派詩人達が拘った究極のテーマである「美しい女性の死[vi]」を扱っている様に、失われて行く伝統（ギリシャ的なもの）と急激に発展してきた新しい考え（アメリカ的なもの）の狭間でポウの苦悶､苦闘する姿がナレーターを通して見えてくる。

『大カラス』

1.

既にクライマックスを念頭において構成されたというこの詩は濃密な時間の流れの中で、ポウが純真に取り組んだ傑作である。「悲劇性」が織り込まれ、技巧的に抽出された詩の特性はあるがままに「繰り返し効果」を提示しようとして探索して行くうちに偶然発見したのであろうか。“ nevermore ”の意味と響きは渾然一体となって、右と左の両側から輪唱して行く。澄んだ声は高く低く暗い情景のなかでセンチメンタルに漂う。暗闇の中で「凛」とした“ nevermore ”の一言は、詩に臨場感を与え「魂の叫び」と応答していく。「絶対にありえない」という存在の否定、あるいはその肯定。そして、「孤独」の実体は時間の流れと共に更なる“ nevermore ”を強調して、「恐怖」を抉り出す。

Ⅱ.

名前すら与えられていないナレーターが暖かい部屋で､今は亡き人である愛する恋人「レノーラ」との思い出に浸っている時､ノックが聞こえてくる。慌てて戸を開くと一羽の真っ黒な「大カラス」が飛び込んできた。

まず、ナレーターが「居眠りをしていた。」と説明をしているように、第 1，第 2 stanza に繰り返して用いられている“ napping ”は、うとうとと，居眠りをする様子が表現されている。そして突然に訪問客が戸を叩く音、“ rapping ”, “ tapping ”が聞こえ、次第にナレーターが「目覚める」ように、小気味よいが無気味なリズムをもっている。

「12 月の寒い真夜中」と設定されたこの静寂な世界に突然と響き渡る「戸を叩く」行為は主人公の不安と恐怖を高める「効果」である。また別の世界へ行ってしまった恋人への思慕が胸に突き上げてきた時、「戸を叩く音」が響く。その瞬間、悲しみを思い出しては悲しみ、過ぎ去った愛の思い出に浸たりながら新たな期待も、主人公の胸の中に高まってくる。ここで「戸を叩いたのは誰だろう」と推理する興味を読者に投げかけている。

….
While I nodded, deary napping, suddenly there came a tapping,
As of some one gently rapping, tapping at my chamber door.
…

又“ napping ”と“ rapping ”, “ tapping ”はそれぞれ対称的な言葉であり、この詩全体を“ napping ”（内部的要素＝眠り）と“ rapping ”, “ tapping ”（外部的要素＝目覚め）に分類して、ナレーターの心理を分析して行く事が出来るように、ポウは「潜む謎」を読者にあたえた。奇抜なアイディアと奇妙で余韻が残るカラスの存在は「不吉な要素」を持ち、情け容赦もなく「眠っていた魂」をたたき起こす。

ナレーターの問いかけに対しカラスは“ nevermore ”と答える。“ nevermore ”はカラスが喋れるたった一言であるが、絶え間ないこの反復効果が又同時に読者やナレーター自身に恐怖をあたえている。“ nevermore ”を繰り返して用いる事により、言葉の響きや意味が哀愁を込めて心に「こだま」する事を願った。そして彼の特異な技法[vii]、「一言」の言葉で読者に漠然とした「夢のような世界」を与え、やがて孤独な心に“ nevermore ”と鳴り響く「効果」を導き出す事に成功したのである。また、読者は“ still ”と“ stillness ”がこの詩に繰り返して用いられる事で、より良い効果が生じている事に気付く。“ still ”と“ stillness ”は“ nevermore ”と共に構成され、カラスとナレーターの両方の心を読者に提供した。そして、言葉の意味を“ nevermore ”と合体させながら各々の個所で更なる効果を上げているのだ。それは静寂の中で失った者へ対して後悔や未練、哀愁を浮かび上がらせ、切々と誰かに訴えるような気持ちを引き出しており、又大変美しい詩である *The Haunted Palace* の解明へ対する手がかりを与えている。この詩は夢のように歌う言葉として“ flowing ”を繰り返し、それによって The Haunted Palace が実際に存在したように思えてくるのだ。“ The fancy nearly creates as imagination; neither creates in any respect… The mind of man can imagine nothing which has no really existed ”「美」をイメージする言葉として彼は“ glowing ”, “ flowing ”, “ sparkling ”, “ sweet duty ”等を選び出し、果てしもなく幻想的だ。しかし、“ evil thing ”が王国を支配するやいなや“ the rapid ghastly river ”の中へ一瞬にして消えてしまう。言葉の音楽的な効果には同時性、神秘性というよりは深い悲しみが込められている。輝いていた「宮殿」とマデライン姫やレノーラと過ごした楽しかった思い出と対比し、底知れぬ無常感を強く主張している。しかし両方の詩に見られる克服できない物悲しさ“ melancholy ”は（いとおしく思うもの）を失う事の不快感を示しているのだろう。正に“ …In solitude, where we are least alone; A truth, which through our being them melt And purifies from self; … [viii] ”である。又大カラスと不可解な応答は次第に彼の魂をからかっているかのようで、彼がイメージした恐怖が数学的に構築され、更なる恐怖を作りだす事に成功している。我々が住んでいる一般的な経験が出来る範囲内では、大カラスはまるで『夏の夜の夢』に見られる邪悪なことが連想される「森」のようである。（観客は「夢」のようにまどろんでいる）現実から隔離された魂の淵に「夢」があったのだ。ポウが求めた夢の実態は「影」と“ in the air of all spirits ”である。

“ nevermore ”という奇妙な同時性、人と鳥の特異な存在の間にある同時性、「不可解な謎」を第 12stanza のグロテスクな言葉等に見ることが出来る。

「レノーラの魂が戻ってきた」という期待を“ ominous bird＝raven ”（不吉のもの＝カラス）というものに変更し、鮮明にして心理的なものを読者に与えている。

But the Raven still beguiling all my fancy into smiling,
Straight I wheeled a cushioned seat in front of bird, and bust and door;
Then, upon the velvet sinking, I betook myself linking
Fancy unto fancy, thinking what this ominous bird of yore——
What this grim, ungainly, ghastly, gaunt, and Ominous bird of yore
Meant in croaking “ Nevermore ”

不安、すなわち「恐怖」というものに対する天才的な洞察力をもち、人間の心に住み着く悪魔的なもの、宿命的なものを熱心に分析している彼の「不安の概念」というものには共感できるものがある。

“ G ”を基調で表す其々の言葉は“ grim ”（不快な）“ ungainly ”（不恰好な）“ ghastly ”（ぞっとする）“ gaunt ”（気味が悪い）等の“ the thing of evil ”を表す統一性を持ち、カラスの存在を不気味にしていく。レノーラを過ごした「暖かい部屋」は幻想にしかすぎない。つまり、幻想と現実の狭間でたった一言の“ nevermore ”は「無意識の状態＝「眠り」」から「意識の状態＝「目覚め」」の状態に反応する。ナレー

ターは救いを求めながら脱出する事は出来ない。払いのけても，払っても悪夢のようなカラスは依然として存在する。恐怖に立ち竦みながら、ナレーターの魂は次第に高揚し、時空を越えて「狂喜」さえ感じ始める。最後の stanza はその象徴であろう。

…. And his eyes have all the seeing of a demon’s that is dreaming…

『アッシャー家の崩壊』

1．

我々は徐々に隠れた真の主人公は story-teller であることに気付く。物語に始まりに彼は名前さえ付けられないナレーターとしてまるで「影」のように登場する。ポウは如何なる特権を与えて暗示させているのだろうか。

この物語を読んだ後、物語を理解することで本質的のものを読者はどのようにして見つけられるのだろうか。この物語の終わりで彼は（輝く沼）“ lurid-tarn ”に引き込まれて崩壊する「館」から命からがら逃げ出し「回想をはじめた。」としたら一体どうなるのだろうか。彼はロデリックの目の中に凝縮されたアッシャー家の悲劇を確かめる事ができる唯一人の人物である。何故彼はそれを鮮明に理解し読者に物語を伝える事が出来たのか。何故ならば愛する妹、マデライン姫とともに館が滅んでいく「幻想の中の美」が「現実」へ移行する瞬間に逃げてしまったのはロデリックだったのである。読者はこのような結論を何故想像できるのだろうか。ナレーターが、「アッシャー家」つまり、ロデリックが妹と共に幻想的に住んでいた「家」を訪問した時、彼は夢の中にいたのである。では、どこに「現実」が存在するのであろうか。彼はそれを支配できたのか。彼自身が「崩壊」させていたのでは無いだろうか。彼が行なった行為は William Wilson[ix]が行なった事と同じである。

極端な恐怖の象徴的な実体を見つける方法としては不気味な「沼」の中にあるだろう。ロデリックは、今やナレーターとして事実を語り始めている。

Ⅱ．

アッシャー家の悲劇として、マデライン姫との暖かい内なる世界と、狂人になるという冷たい外なる世界の「矛盾」へ目を向けてみよう。これはロデリックだけの悲劇である。名前のないナレーターが友人であるロデリックを尋ねた時、アッシャー家は陰鬱な雰囲気があったと述懐している。家と窓のような目は全ての概念を超えた「影」であり、悲劇を創り出している。

ポウの主な原理は効果のある言葉を用いて純粋である。言葉の構成はロデリックの心の中に次第に高まる恐怖を同時に読者の心の中にも生じさせた。創造的なものを誘発させ、噴出してくる効果を異端者として凝視しているのだ。

ポウはアッシャーの館を沼の中へ引っ張り込んだ時から *The Haunted Palace* を挿入する事に決めていた。沼はロデリックが痛ましいほど恐れている「死」が存在する。彼女の死はアッシャー家の滅亡と彼自身の死を意味しているが、幻影と感覚の中でアッシャー一族で最後の一人になるというロデリックの孤独は、狂人になるという事への「怯え」のため錯乱しており、マデライン姫の愛の儚げさとは対象をなす。

しかし「不可解な病」に取りつかれた時から、幻想的な生活は終局へ向かっていた。マデライン姫は警告していたが、ロデリックは「陶酔感」に浸っていて聞き入れず、「崩壊者」であるナレーターの「正体」を見抜くことができなかったため彼を招き入れてしまった。これらの言い訳は彼が「理性」の仮面を被った「エゴイストである」事の証明である。これらの矛盾がナレーターも感心した野心的な「詩」を推測し、さらに幻想的な「美」への招待になるだろう。*The Haunted Palace* に「沼」と同じ不思議さを念頭におけば、ロデリックの心が読み取れる。そこに、接触できない「美」と感知出来ない透明な「影」が残酷に存在している。彼は自己矛盾の中で、救世主のような「究極の美」を求めたのだ。

The Haunted Palace はまさに“ fancy and imagination ”のために創り出されたものだ。これら数行から判断すれば、ポウの審美眼が何を追求しているのかの基

準が理解できる。
「あの思い出の谷、善良な天使達が住んでいる、緑の一番深いとところ、…」で始まる *The Haunted Palace* はきっと好奇心に溢れ、想像力豊かな眸を輝かす純粋無垢な子供達を夢中にさせるようなゆったりと語りかけるような口調ではじまる。この詩は幻想的で読者の「想像力」を駆り立てていき、語り手であるポウは得意の前兆にあって魂の興奮を伸びやかに高めて行く。全体的に明るく、陽気で、生命力に溢れた律動感があり、前途洋々たる活力感に漲っている。

In the greenest of our valley,
By good angels tenanted,
Once a fair and stately palace-
Radiant palace- reared its head
In the monarch Thought's dominion-
It stood there!
…
（From *The Haunted Palace*）

Ⅲ.

ロデリックの心の深いところにある全てが“ melancholy であり、“ imagination ”なのだ。
ロデリックは曖昧な「色」を用いて絵を描く。マデライン姫を埋葬した場所を暗示した場所ではないかと推測される。過激に反応しながら観察する事により、彼の心の奥を覗く事になる。それらを判断するためには、詩の後半と比較すれば明らかになるようポウは物語でも詩でも特徴的な人物を作り上げて彼自身を存在させナレーターでもない、友人でもない「影」のようなヒーローとして距離をおいて離れた場所から見つめていた。ポウの冷徹な形式である「芸術性の二面性」を証明するには、ナレーターが文頭で読者に語り始めた「アッシャー家」の印象を思い出さねばならない。そのグロテスクさをいかに象徴的に表現されているのかを考察していく過程で、沼の中に「アッシャー家」の本当の姿を覗く事ができる。極端な暗い「沼」が現実感を伴い不気味で、陰鬱な「闇」が占領している。事実が「沼」の中に音響となって相和し「寂滅為楽」と響くように不可解な疑問を投げかけている。

… that of looking down within the tarn-had been to deepen the first singular impression…There can no doubt the consciousness of the rapid increase of my supersition…served mainly to accelerate the increase of itself…is the paradoxical low of all sentiments having terror as basic.（p.247）

ポウはナレーターと共に活躍する Dupin を中心に３編の「探偵物語」を創作し、彼に数学的な知識と解明する力、そして imagination を与えた。
The Haunted Palace の後半を引用してみよう。

And travelers now within that valley,
Through the red-litten windows,see
Vast forms that move fantastically
To a discordant melody;
While, like a rapid ghastly river,
Through the pale door,
A hideous throng rush out forever,
A laugh—but smile no more

前半と比較して、この対称的な詩を読んでいくうちに、ポウの意図した魂の内面と外面の世界の違いに気づく。「目覚め」と「眠り」の区別があるようにポウは個々に自分の姿を分けた。ナレーターが冒頭で発見した「沼の中の館」「感知出来ない壁の裂け目」
はそれぞれを暗示したものであり、「詩」の結末は「理
性の崩壊＝夢の崩壊＝現実」を意味している。
彼の混乱した「知性」は、正に断崖絶壁の端に爪先で立ち、次第に混濁して行く精神の中で「昏倒」する寸前である。
“ A wakefulness which is instantaneous change from sleep, There was a painful[x] ”このキーツの詩と比べて見るとポウの「意図」的なものが浮かび上がってくる。繊細な魂の叫びや緊張感が伝わってくるこの

「詩」の中で 狂気するポウと同時代の詩人達が繰り返したテーマが時空を超えて、底のない沼や留まる事のない川の流れに imagination を暴発させた。彼らは詩の中で人類の感情とは、「悲しみや、喜び、別れや驚き」であるが、“ Music is the perfection of soul or idea of Poetry[xi] ”と主張するポウは，更に「魂の調和」として「音楽の状態」を求めたのである。音楽や芸術に貢献する家系出身のロデリックは正に審美家として「詩」を創作し「楽器」を奏で、朗々とした妙な声で歌を謡う魅力的な人物である。「無意識」と「夢の中」で彼は光彩に浸りながら、一方で「目覚め」を意識して絶望感に陥る。その交錯する狭間の中で深い衝撃を受けているのだ。

> …In every glimpse of beauty presented, we catch, through long and wild vistas, dim bewildering visions of a far more ethereal beauty beyond…(p.649.)

Ⅳ.

謎めいて感知できない影が漂い、そして物語の暗さからの僅かな美を想像させ、その卓越したアラベスクの技法は「透明な清潔感」がある。彼は繊細な音程を保ち、しかも放歌高吟を試みる。又、言葉を丹念に推敲して行く過程の天才的な霊感という奔放性ではなく、むしろ数学的な冷静さで、彼は崇高な精神性をもった“ fancy”を創り出し、恐怖を快楽へ転化させた。恐ろしいまでに「神秘的なもの」として魂に反響する言葉を用いて、その背後に隠れて、見えないものを探した。それはグロテスク的な文章から読み取れる、正に「魂の恐怖」である。

> …His ordinary manner had vanished. His ordinary occupations were neglected or forgotten. He roared from chamber to chamber with hurried, unequal, and objectless step…There were times, indeed, when I thought his unceasingly agitated mind was laboring with some oppressive secret, to divulge which he struggled for the necessary courage. （p.260）

物語のクライマックスで暴露された「秘密」は妹を「早すぎる埋葬」をしてしまったことだ。彼の罪は双子で人生のパートナーである妹の死を確認しないまま埋葬してしまうという「殺人」を行なった事である。これは館周りの雰囲気が彼を狂人として妹を殺すという殺人行為を導いたのである。館とロデリックは同一視出来る関係にある。館の周辺には“ minute fungi hanging a fine tangled web-work ”や“ the decayed tree which stood around ”（p.248） 等が見られ、恐しい雰囲気を醸し出している。既にロデリックは屋敷を取り囲んでいる「雰囲気」に雁字搦めで、「屋敷と一体化」（共犯）であると、理解できる。窒息状態にあり、暗黒の中で密封された「炎」のような悪魔のエネルギーは暴発寸前である。末端の神経まで、あるいは、骨の髄まで凍らせるような「不安」。そして絶望が理性を食いつぶす。*The Haunted Palace* はそのようなロデリックの心理を物語っている。

理性ある聡明な「王」に支配されている The Haunted Palace が「悪しき物」によって突然に占領されるや、「魔宮」に変貌していくように彼もまた、感知できない「不安」のために「恐怖」を体験する。目に見えない恐怖は理性を失わせる。「美しいもの」が「夜叉」へ変貌する瞬間の「恐怖」は絶叫の「歓声」を上げるのだろう。読者が感じるポウの創り出した臨場感ある絵画のような場面は、絵を作り出す言葉と協調させている。 ポウの救いはナレーターの存在であったのかも知れない。

“ the destinies of his family and made what I now saw him－ what he was ”（p.258）このセンテンスは秘密を解く大きな鍵が見られるようだ。お互いを見つめる「目」と「目」があり、二人を分けるより恐ろしい力が有る。ロデリックは夢と「無意識」の中にあって、ナレーターは現実を意味する「意識」の中にいる。「無意識と意識」は「眠りと目覚め」であり、それぞれに相反する感情である。ポウは二人の登場人物をこの瞬間に「数学的な技術」で交代させたのだ。

> Never shall I forget the sensation of awe, horror

and admiration.（p.149）

その一瞬に「魂」が浄化される。瞬間の恍惚感、しかしながらポウは読者に衝撃的な深い「畏敬の念」を読者に与えながら依然として無言である。「天上界」へ到達するような洗練された、崇高な「美」が感じられる「至極の幸福感」である。

Ⅴ.

ナレーターはまだ興奮状態から逃れる事が出来ないでいる彼に「心気症」があるのを認める。そしてロデリックの心を慰めるために、*Mad Trist of Sir Lancelot Canning*（p.263）を取り上げる。挿入された物語で Ethelred は隠者の屋敷へ入り火を吐く竜に出会う。黄金の宮殿は銀の床を張られ、輝く真鋳の盾が壁に吊るされていた。Ethelred は竜の首を刀で切り落とす。物語からの恐ろしい激しい音は「軋む音」として二人の心に反響する効果として用いられポウも熱狂する。これらの音は読者は後でマデライン姫が棺桶の蓋を開こうと悶闘して、死の恐怖から逃れようしているために生じたためと解る。

ポウの言葉は想像力を導き出す技術としての効果をさらに高めているが、詩は実際、人間が演技をする芝居などとは異なり、言葉が音を創出す。「映像的な効果」は緊張感が漂い、洒脱な味を持っている。真剣勝負を挑むスリリングで強烈な個性と恐怖を引き起こす暗闇の正体は“ lurid tarn ”なのだ。

アッシャーの結合した性の概念は「近親相姦」であろうか。窓のような「目」と彼の罪を暴露した「沼」は幻想的である。これは象徴的な imagination である。「理性」と「肉欲」の合体は「崩壊」する事で完成されたのだろうか。ポウは「沼」を解答させるために登場させてはいない。沼に「館」を引き込んだ瞬間、ポウはそこに「何もない」事を知った。実際、何も解決していないのである。ロデリックはミラーボールが点滅しながら煌くダンスホールの中で、騒音のような「音楽」にあわせて踊り狂う人々の炸裂し、混乱状態にある「魂」と同じなのだ。ミラーボールと過激な音楽に操られた「仮想現実」は所詮、すべて「夢の中」での出来事にすぎない。この狂乱した「仮想現実」を創り上げた要素が停止すれば、そこには凍りついた「静寂」が突然に襲い「目覚め」の瞬間の虚無感と虚脱感を苛まさせる。突然に姿を現す「現実の世界」は「仮想現実」で体験した有頂天の自信を完全に打ち砕き、理性を燃焼させてしまう絶望は「魂の恐怖」である。そして、マデライン姫が「蘇ってくる」という現実だけに「遭遇」するのだ。彼女との「合体」、つまり死への恐怖は一瞬にして、その苦しみから解き放つ。束の間の“ pleasurable ”は歓喜に溢れ「魂の調和」となる。

ポウは幻想と恐怖に巻き込まれているロデリックを助けたかったのだ。そこでロデリックをナレーターとして再び登場させたのである。「回顧する者」として、穏やかな口調でこの「物語」を読者に語る姿が、いかにも印象的である。

…

The devotion to something afar
From the sphere for our sorrow[xii]

「目」の描写について

1.

最も強烈で印象的な描写として『アッシャー家の崩壊』における「窓のような目」である。そして『リージア』における「天文学者になってしまいそうな星のような目」の神秘性である。象徴的な目として、「火のような片目」の『黒猫』の目、そして『物言う心臓』の「フイリムのかかった、血の気のない、青い目」は、各々の物語で、ナレーターの心を凍りつかせ、巧みに誘導してその「罪」を暴露させる。目というのは、本来何かを求めて探すため、人間と自然の両方に存在して、相反するものを凝視する役目を担っている。その計り知れない力は心の闇の更なる深い部分を貫き、恍惚とする「一瞬」を冷徹に見抜く能力を持っているのだ。ポウの代表的な作品に見られる「目」の描写は大変興味深く、多種に及んでいる。文頭において哀愁を漂わせて丹念に描写された『アッシャー家の崩壊』に見られるように、名前すら与えられていないナレーターの「目」はロデッリクのあらゆる場面を丁寧に分析し、冷酷に解明していく。ロデリックの「目」も又、彼が如何なるメッセージを提示しているのかを意味し、とても重要な事を暗示

しているのだ。

物語の始まりにおいて、彼の「目」の状態は良好であった。“ Large, liquid, luminous beyond comparison and expressed miraculous luster ”は、いかに彼が精神的に安定しているかを伝えている。彼にまだ狂気は訪れていなかった。ロデリックの場合、後半は彼の「目」は狂気が現れ始めているのを示す。これは、彼が耐えられない孤独を予感して「アッシャー家の最後の一人になってしまう」という悲しみが恐怖と不安を味わっているからである。ロデリックは絶体絶命であり、精神的に追い詰められていく様子は妹のマデライン姫の「目」に涙が溢れるということから推察する事ができる。この注意深く、流麗な描写は圧巻であり、物語の暗さに対して強烈な「可憐さ」を添えている。

> When a door at length, closed upon her, my glance sought instinctively and eagerly of the brother…I could only perceive that a far more than ordinary wanness had overspread emaciated fingers through which trickled many passionate tears.(P.253)

この僅かな数行の、マデライン姫の登場によって読者は、彼女が兄を愛しているという感想を擁護するだろう。それは森の中で眠りから目覚め、デミトリアスという恋人を失っている事に気付いたヘルミアが涙を流し、叫び声をあげる時の感情である。

事実二人の女性は全く無垢であった。そして、あまりにも純粋だったのである。彼らの愛が無垢であればあるほど胸に突き上げてくる悲しみは純化されない。マデライン姫の哀愁が込められた状況というのはシェイクスピアのイマジネーションによるヘルミアが暗闇の森の中で抱いた感情と同じであり、まさに裏切られるのではないかという不安から生じる恐怖を意識しているのだ。それは当然「別離」や「死別」を予感している。

マデライン姫の死後、ロデリックと彼の友人であるナレーターは彼女を埋葬する。しかし、ロデリックの誤解によって彼女を生きながら「埋葬」したことは「殺人」である。この誤解は悲劇を作り出し、これにより彼女の復讐が開始される。一方、彼女は「愛」のためにこの世へ蘇ってくる。しかしながら、エゴイストであるロデリック彼女の「愛」を受け入れる事が出来なかったために、自ら予言したように「恐怖」によって、「狂人」となりその「愛」の為に自らを「崩壊」させてしまう。

『大カラス』の目はナレーターを苦しめる。「カラス」を愛するレノーラの「変貌した魂」と仮定すれば“ nevermore ”とナレーターへ応答するのも納得がいくだろう。言葉の「二重性」は彼の“ imagination ”を現すものである。“ nevermore ”は「生」と「死」の境界線であり、人間は決して乗り越えることが出来ない。「カラス」は無作法にも悠々と乗り越えて、「死者の魂」を運んでくる。レノーラは恋人であるナレーターが「死」という現実を直視出来ない事実を指摘して“ nevermore ”と伝えるのである。

Ⅱ.

二重の世界とは、シェイクスピア等によって創作された現実と疑惑の世界である。マデライン姫の見たものと、ヘルミアのみたものでは共通性がある。他方に“ still ”という「言葉」を用いて「アッシャー家」のそばにある沼の存在が象徴する「窓のような目」を一段と強調させ、詩と物語の両方に意識の力を超えた表現を用いて“ grotesque ”を強めている。その方法として“ Take thy beak from my heart, and take thy from off my door ”に新たな発見ができるだろう。これらはポウが予想したようにまさに恐怖である。その結果として、彼はDupin探偵が登場する三つの探偵小説を作り上げた。William Wilson も同様である。彼は「二重性」を好んだ。Wilson の二重性は、「一人はこちら、もう一人はあちらというのは恐怖であり、その答えは死かこの世への蘇り」である。これらが凝縮したのが『アッシャー家』の物語である。言葉に「響き」と「その意味」の両方に「二重性」を求めた。

『盗まれた手紙』の中には 2-3 の例が見られる[xiii]。これは社会的そして特異な「曖昧性」が際立った構成力がある。珍しく残虐性はない心理的のものであ

る。分析と効果における構成力は特徴的なエゴを作り出している。大胆な抽象化の意向､奔放さは『モルグ街の殺人事件』では人間の会話と間違うような動物の鳴き声､「オランウータン」が鏡の中でその買主が髭を剃ると言う行為を真似し、やがては「殺人事件」を起こすという「ありえない事件」を作出す。また、徹底的な「言葉」の「意味」と「響き」への探究心は鋭い緊張感をはらんだ構成力を持ち､「想像と解析」を求め、表現が極めて多様である。

この当時の詩人達と同様にポウは詩人として「想像力」を“ fancy ”の中に探した。「酔ったような眠り」に「美」を求め「魂の安らぎ」を追求する。甘い芳香の中に「微睡む肉体」は眠りから覚めない。極めて霊的までに美しい想像力に浸りながら「恍惚」として、妙なる調べの中で歓喜に満たされる。

その結果であるが、マデライン姫が彼女の目から涙を流す行為の美しさとロデリックが神経質的に狂気から生じる恐怖を漂わせる目の対比は共に美しい。これら「美」を求める芸術的達成度の高さ､新鮮な衝撃力は確固たる自己の世界を持つ表現者の執念である。

＜結論＞

ポウが心血を注いで完成させた *Eureka*（1848）は散文詩であるが、彼の理念が覗われる。

> …All the creatures have, in a greater or less degree, a capacity for pleasure and for pain*; ―but the general sum of their sensations is precisely that amount of Happiness which appertains by right to Divine Being when concentrated within Himself….*

全てを超越し，苦悩から脱出する事に成功したポウの姿が垣間見られる。しかしながら、この心境に至るまでのポウは､「詩人」として､「作家」として､あるいは「批評家」として、自他共に認める「癇癪持ち」の芸術家であった。“ the unconquerable desire to know ”という崇高な精神を持ち､「詩人」として「聞えないものを聴き、見えないものを見る」ために常に繊細な神経を「苛立たせ」た。詩とは伝統的なものが次第に剥げ落ち、その時代の象徴的なものである。詩人達は新しい時代を作るためにその作品に結集させたのである。ポウは「想像と解析する力」を根底において“ fancy and imagination ”を解明するために、魂の「恍惚状態」を持続させて「究極の美」を探求したのである。彼が到達した「美の極地」は「生」と「死」、あるいは「狂気」と「喜び」が交叉する、その一瞬にしか存在しない。

彼の「物語」ではドイツ的な「ゴシック文学」ではなく「魂の恐怖」こそが「グロテスク」と断言しているように、主人公の「魂の叫び」を数学的な正確さで構築している。「物語」の結果が綿密に構成され、技巧的で「アラベスク」に描写され、丹念な説明がなされている。*Morella* に例が見られるだろう。

幸福な結婚生活を営んでいるはずの、モレラとその夫。しかし、夫は突然にその妻の“ musical voice ”に不快を感じ、目に見えない「恐怖」を感じる。“ a forbidden spirit enkindling within me ”は夫の内面を煽り立てる。夫の内面に存在するものは一体何であったのであろうか。[xiv] “ …joy suddenly faded into horror and the most beautiful become the most hideous ”（p.219）

過剰な「魂の恐怖＝グロテスク」を露出させながら、繰り返される言葉は霊的な気配を持った空間に満ちている。恐怖を漂わせながら唐突に浮遊する「謎」は読者の「追慕の情」を引きずり出し、微妙な心理を炙り出している。追憶と記憶を矛盾や葛藤の中に置いている。

「グロテスクなものをアラベスク的技術で描写する事」を自らの宿命をして、その繊細で卓越した描写力は、まるで「絵画」のようである。そこから感じられる感動を読者は“ sensational awe ”の境地と思うだろう。

> The rays of the moon seemed to search the very bottom of the profound gulf…a thick mist in which, everything there was enveloped, and over which there hung a magnificent rainbow, like that narrow and tottering bridge which Mussulmen say is the

only pathway between Time and Eternity….(*A Descent into the Maelstrom*: p.150*)* （下線は筆者による）

恍惚とした狂喜の叫びは、その儚さのため「恐怖」へ移行してしまうのである[xv]。
「喜び」と「悲しみ」は「裏と表」であり、ポウはその瞬間の「時間」を止めて、「美」を見つけることが出来たのだ。全ての苦悩から魂が「開放」される、その「一瞬」に。

（注）

[i] Ingram: p.132.-133.

[ii] 1848 年 1 月 4 日 George Eleveth に宛てた手紙によると「6 年前に妻が歌を歌っている最中に吐血をした。以後数回同じ事が繰り返され，その度に妻の死を予感した。」等が書かれており、ポウの悲しみの原点であるといえる。

[iii] Ingram: p.133.

[iv] Coleridge は代表的な論文である *Bibiograhia Literaria* において「ワーズワース氏とこの件にて議論を重ねたが、まだ結論に達していない。」と述べている。ポウ自身は「コールリッジの imagination は fancy と結合しているようだ」と考えている。

[v] *A fable for Critics* by James Lowell 等に見られるように、ポウの詩に対する形式主義は「陳腐で、時代遅れ」と非難をしている。又 Emerson は『詩人』にて「詩人は「韻」「音」等を煩く述べて、まるで Jingle-man か Music-box のようだ。」と感想を述べている。

[vi]『構成の原理』：p.557.“ *Beauty*: the death, then, of a beautiful woman is, unquestionably, the most poetic topic in the world.” 又メランコリーが「美」の正統性であり、そのためには「女性の死」が究極のテーマであると主張している。

[vii] 『構成の原理』においても“ nevermore ”という言葉の繰り返しが「詩」の効果の一つであると述べているが『黄金虫』の中でも「言葉とは記号のようなものであり、一つ一つの組み立てが数学的な解明や想像力を高める事に役に立つ」というような事を述べている

[viii] *Childe Harold's Pilgrimage, Canto*Ⅲ*XC* by Lord Byron: *Selected Poems* : Susan J. Wolfson and Peter J. Manning, London: Penguin Books, 1996 (p.445.)

[ix] 影のウィルソンに付きまとわれて「恐怖」に陥っている主人公のウィルソンは混乱状態の中で彼を殺してしまう。「君は私を殺したが，自分自身を殺したのだよ。」と影のウィルソンは叫びながら絶命する。

[x] *The Eve of St.Agents* by John Keats, *Selected Poems* : John Barnard, London: Penguin Books, 1988.(P.150.)

[xi] ポウが友人に宛てた手紙であるが、彼の「主張」でもある。

[xii] Percy Shelly: *One word is too often profaned*（平井正穂編『イギリス名詩選』東京、岩波書店、1986.）p.207.

[xiii] 『盗まれた手紙』では「錯覚」という心理的なものを扱っている。予想もしなかったところから「手紙」が出てくるのだ。ポウはこれらの構成を「数学的」と示している。

[xiv]『モレラ』や『リージア』は他者の体を借りて夫のもとへ甦ってくる女性をテーマにしている。モレラは生きていた時は夫の愛を得られなかったが、その死後その娘に母親の生命が受け継がれ、夫は「妻に生き写し」の娘に禁じられた愛を感じて苦しむ。同じ様に『リージア』の女主人公は「死んでも愛のために「生きていたい」」と情念を燃やし、再婚した二度目の妻の体を借りて「甦」る。夫は愕然とする。

[xv] “ horror and admiration ”は同時に“ the next moment all this joy turned horror ”を意味する。この移行の瞬間が「平穏な調和」であり「美」が見つけられる等をポウが述べているが、ホイットマンは「その一瞬」が「今」である。
“ There was never any more inception than there is now, Nor any more youth or age than there is now, And will never be any more perfection than there is now, Nor any more heaven or hell than there is now. ”“ Will you speak before I am gone? will you prove already too late. ”(*Song of Myself* by Walt Whitman) 如何なる時代の詩人達においても「イマジネション」の価値観は共通している。詩人たちは「魂の開放」を其々の「定理」の一瞬に賭けていたのだ。

参考文献

Poe, Edgar Allan. *Selected and Edited, with an Introduction and Notes* : Philip Van Doren Stern, N.Y.: Penguin Books, 1973.

本論文では一貫してこの版を使用し、本文中で括弧に入れて示したものは全て同書からの引用とする。

Coleridge, Samuel Tayler. *The Major Works* ed by H.J. Jackson, London: Oxford University Press, 2000.

Keats, John. *Selected Poems* by John Barnard, London: Penguin Books, 1988.

Ingram, John H. *Edgar Allan Poe, His Life, Letters, and Opinions*, N.Y.: Arms Press, 1965.

Lord Byron. *Selected Poems* by Susan J. Wolfson and Peter J. Manning, London: Penguin Books, 1996.

Spengemann, William, *Nineteenth-Century American Poetry*, London: Penguin Books, 1996

Quinn, Arthur Hobson and Shawn Rosenheim, *Edgar Allan Poe, A Critical Biography*, Baltimore and London: The John Hopkins University Press, 1998.

平井正穂編『イギリス名詩選』東京、岩波書店、1986.

福永武彦訳『ポウ詩と詩論』京都、創元推理文庫、1997

山川偉也『古代ギリシアの思想』東京、講談社学術文庫、1997.